

JICA 気象学集団研修30年*

佐 藤 千 鶴 子**

1. はじめに

1973年から2002年までの30年間、気象庁におけるJICA（国際協力事業団）気象学集団研修コースの研修監理員を務めた。気象庁の皆様の熱意と温かいお人柄に接し、まじめな研修員に恵まれ、充実した歳月を過ごした。その30年を振り返ってまとめてみた。

2. JICA（国際協力事業団）の概要^{†1}

2.1 JICA

JICA^{†2}は2003年10月1日、国際協力機構ジャイカに改組された。ジャイカは、開発途上国の経済・社会の発展に寄与し、国際協力促進を図るため、政府ベースの技術協力を一元的に行う機関であり、研修員受入、専門家派遣、機材供与、プロジェクト方式技術協力、開発調査、青年海外協力隊、開発協力、災害緊急援助協力、無償資金協力、などの事業を実施している。

2.2 研修員受入事業

研修員受入事業は、開発途上諸国の人材育成および組織・制度の強化を通じて、これらの国々の社会・経済の発展に寄与すること、ならびに、研修の場における相互交流を通じて、知日派、親日派を育成することを目的とする。そして、日本の講師や研修運営関係者と途上国の技術者や行政官といった、人と人とのふれあいを通じて技術の移転を図るものである。従って、「人造り」を主眼とした技術協力における、もっとも基本的な事業であると言える。

研修員は、自国において社会・経済開発の中心的役割を担う技術者、研究者、行政官などの中堅公務員が大多数であり、いずれも自国政府の推薦を受けて来日する。研修員はその職場において指導的地位にあるので、研修のために来日する人々を「研修員」と呼び、

英語では「Participant」で、「Trainee」ではなく、留学生や研修生とは区別している。また、わが国の国際協力の実施上、特別の配慮が必要と認められた研修員を、その地位に応じて高級研修員、準高級研修員として受入れ、一般研修員とは異なった対応・待遇をする。

研修員の受入は開発途上諸国の要請に基づいて実施される。来日した研修員は、日本に滞在することによって、日本の技術のみならず、その技術を育んだ我が国の文化や社会、日本人の行動規範や職業倫理なども同時に学ぶことになる。一方我々日本人側も、研修員からさまざまなことを学ぶ。また、研修員相互の理解・親睦を深める場も提供される。このような多様な交流を通じて世界の人々の相互理解を深め、国際親善に貢献することも本事業の1つである。

研修員受入事業は、1954年の我が国のコロンボ・プラン加盟を契機に、我が国初の政府開発援助（ODA）として始まった。その年に16名の研修員を受入れて以来、受入人数も対象国も年々増加し、1994年には累計受入人数は10万人を越えた。現在、技術研修員の受入人数は9千人前後で推移しており、研修内容も時代のニーズにこたえて多様化してきている。

日本で実施される研修（海外に研修現場をおく第三国研修もある）の場合、ジャイカは国やその他の関係諸機関の協力を得て、研修の計画立案、実施、進行管理、評価などを担当する。各研修コースは、ジャイカと当該分野の専門的技術・知識を持った機関の協議のもとにカリキュラムが決定され、研修員を選考し、その機関において研修が実施される。これらの研修実施機関を通称して「研修受入機関」、「研修受入先」と呼ぶ。国や地方公共団体の試験研究機関、大学、公益法人、民間団体、企業などがこれらの機関に該当する。

* Thirty years of JICA Group Training Course in Meteorology.

** Chizuko SATO, 日本国際協力センター（JICE）非常勤研修監理員。

© 2005 日本気象学会

^{†1} 本節の記述は（財）日本国際協力センター研修監理部（2003）から抜粋した。

^{†2} 以下では現ジャイカに通ずる内容の時にはジャイカ、2002年以前の内容の時にはJICAと記載することにする。

従って、これら研修実施にあたっては、ジャイカと研修受入先、JICE¹³の研修監理員の三者の良好な協力関係が重要である。特に研修監理員は、研修員と日本側関係者との仲介役でもあるため、研修員を含めたすべての研修関係者間の良好な関係を作り出す役割を果たすことになる。

3. 気象学集団研修

3.1 気象学集団研修とは

気象学集団研修コースとは、北海道から沖縄まで全国で実施されている年間300ほどの集団研修コースの1つで、気象庁が受入先である。毎年10人前後の各国気象局の中堅気象官（時には大学関係者も）が推薦されて参加し、4か月滞在する。この30年間に61か国217人が集団研修に参加した。個別研修員も合流するので総合計はそれ以上になる。2002年度気象学実施要領（国際協力事業団、2002）の一部（以下『』内）を引用・紹介する。

『コースの目的』

○わが国政府の技術協力計画の一環として、参加国における気象業務の技術向上に寄与すべく実施するものである。

○実施にあたっては、講義、実習、及び研修旅行ならびに関連施設見学を通じ、日本の気象分野における知識及び技術を紹介するとともに、研修員が帰国後それぞれの国における気象業務の発展のため指導的な役割を果たせるよう、気象業務について幅広い知識・技術の移転に努める。

○さらに以上のことを通じ、世界気象事業にとって必要不可欠な国際協力への認識を相互に深めるとともに、併せて日本と参加国との友好の促進に資する。

『到達目標』

○気象庁において気象観測からデータ収集・処理・解析を通じて気象情報が作成・提供される過程における技術・手法を習得し、参加国の気象業務への活用を図るとともに、研修参加国において気象庁が提供する

気象情報の一層の有効利用に資する能力を高める。

○気象業務に関連する多様な課題の提示や、最近の気象分野での技術の進歩の紹介により、研修員に帰国後一層の勉学を深めるための糸口を与える。

○実習、見学、研修旅行を通じて研修員に広範な知識と体験の機会を提供する。

○研修員相互及び研修関係者（講師等）との交流を図ることにより、気象業務に不可欠な国際協力の精神を熟成する。

『カリキュラム』

○気象の現業業務に関わる全般的知識と技術、気象業務に関するパソコンの活用、衛星データの活用、数値予報の概念を含む、短・中・長期予報の手法、気象庁における研究活動などを含み、気象学の基礎、観測、その解析と予報、及び海洋気象関連事項について気象庁本庁、気象研究所、気象衛星センター、気象大学校で講義、実習を実施する』

3.2 選考から来日まで

研修内容が多様化している昨今、新設コースがある一方で廃止されるものもある。気象学も20年目に見直しを迎え、存続が認められ10年延長になった。30年目に再び見直し・承認を経て、2003年に内容一新で新規開始になった。必要性が認められている優良技術研修コースであるわけで、そのような研修コースに長年深く関わってこられたのは本当に幸せだったと思う。

定員も当初の5名から今は9名になった。気象学コースの案内 General Information (G. I.) は9より2つ多い11の割当国の政府に送付され、そこからそれぞれの国の気象局に行き、しかるべき候補がノミネートされる。その案内(G. I.)には参加資格条件、研修内容、到達目標などが記載されている。

割当国の選出は、前年度の要望調査で気象分野への意思表示をし、かつ優先順位の高い発展途上諸国（アジア、中近東、アフリカ、オセアニア、中南米、東欧）の中から広くあまねく、気象庁とジャイカの協議でなされる。日本の重点援助対象地域であるインドシナ半島や、プロジェクト進行中の国は特別配慮される。

ノミネートされた候補たちの要請書は締切り日までに順次届くが、遅れている国には督促状が行く。11か国全部から回答があるとは限らず、無回答の国、「該当者なし」と返答する国もたまにはある。それ故に案内はプラス2の11か国に送付される。応募数はそのコース存続の必要性の重要な指針になる。毎回定員を下回ると、必要性が少ないと見なされ、廃止の対象になっ

¹³ (財)日本国際協力センター (JICE: Japan International Cooperation Center) は、1977年3月25日にわが国の国際協力事業の推進に寄与することを目的に設立された公益法人で、国際協力事業団の活動に関する知識の普及、国際協力事業の実施に関する協力、国際協力関係者の福利厚生等の支援業務を行っている。

てしまう。

届いた要請書を揃えて気象庁とジャイカは選考会を開く。参加資格条件中で、特に学歴と経験を重視して9名を選考し、余裕があれば定員以上取る。選考会の目的は人数を揃えることではなく、研修の運営に相応しい人たちを選考することなので、レベルが高すぎたり、資格条件が充分でない人は落とされる。年齢制限は40歳未満だが、競争が激しい時以外、多少の年齢オーバーは問題にならない。どの人にも来て貰いたいほど優劣のつけ難い候補者揃いの時は、予算の都合上、やむなく誰かを落とさなければならずとても辛い。

選出された人たちには即座に入受回答が出され、指定日に来日できる航空券が発券される。外れた人たちにも同時にその旨の回答が行く。3~4週間後の指定日に成田に到着すると、ジャイカ・カウンター経由でジャイカの宿泊施設、東京インターナショナルセンター（当時の通称 TIC）に到着する。こうして、気象学の研修員は日本での第1日目を迎える。

3.3 来日から気象庁初日まで

宿舎にチェックインした研修員は私がフロントに預けた書類を受け取り、翌日の各種手続きの必要事項を知る。翌朝、前日到着した研修員全員が集まる。ピーク時には100人を越える。入口の張り紙に席の指示があり、当人用の書類が揃えてある。気象学の席に行くと、要請書の添付写真と同じ顔の人、髭や眼鏡で見かけがちょっと違う人、写真よりはるかにふけた人などが慎重な面持ちで座っている。4か月を共に過ごす私にとってとても楽しみな初対面の瞬間である。

書類の確認・署名、メディカルカード発行、ビデオで日本の生活・防災・ジャイカ紹介と続くが、長旅の疲れと時差で大半が居眠りしてしまう。その後宿舎の館内ツアーがあり、国際電話、福利厚生、洗濯、運動、音楽など生活の場に関して教わり、午後は滞在費の説明と銀行カード手渡しなので俄然真剣になる。暗証番号は事務処理上、自動的に決められる。

翌日から2日間の General Orientation Program で日本の社会と日本人、教育、経済、政治・行政、歴史・文化を受講し、日本タテヨコ、日本地図、統計書も貰い、かなりの基礎知識習得となる。このコースは滞在日数上、外国人登録や身体検査も必要になる。

外国人登録では名前を画的に First, Middle, Last の順で書かせるが、苗字のない国、名前の構造が自分の呼び名、父の名、祖父の名、という国もある。区役所は Last は苗字と解釈し、それで呼ぶが、「祖父の名

と呼ばれたことない」そうで、自分が呼ばれたとはすぐには判らないと言う。出生地欄 (Place of Birth) に Hospital と記入した研修員がいた。

来日した週のうちに関係者が一同に会す。気象庁の担当、ジャイカの気象学担当、研修監理員の私と研修員全員が顔を揃え、自己紹介の後、研修内容の紹介がある。次週からの研修に大きな抱負と期待を抱いているのが感じられる。

初めての週末に早々と秋葉原に繰り出す人も、宿舎の先住同胞人の案内で新宿近辺を散策する人も、治安の良さと交通機関の便利さを実感する。そして月曜日には長官表敬をするので、8月下旬の猛暑でも正装する。スリランカやタイと同じでエチオピアより暑いそうで、全員がこんなに暑いとは思わなかったと言う。

3.4 研修の初日

初日は気象庁の正面玄関から案内し、官署配置図を見せる。観測密度にまず驚く。長官表敬、記念撮影、各部署挨拶、ゴミの仕分け方も含む庁内決まりごとなどを教わる。翌日は研修員のカントリーレポート発表会である。本庁内外の講師や各部研修担当官が大勢集まって下さり、発表者は緊張する。以前は OHP 使用だったが、昨今は工夫を凝らしたパワーポイント発表が主流になった。ある年たまたまその日が WMO のオバシ氏の気象庁訪問日に当り、気象庁の国際協力業務紹介の一環としてこの発表会も見学の1つになった。オバシ氏入室の際にはアフリカ研修員の発表が好ましいので、入室予定時刻にガーナの発表になるよう備えた。周りで気を揉むほど予定時刻が大幅に遅れたが、その研修員は話をつないでその場を持たせ、ようやくオバシ氏が現れた時には堂々と発表体勢に入った。一同安堵し、その演出のうまさに関心させられた。

その夜は長官主催歓迎会で、予定講師たちとも話しが弾む。関係者全員がこれからの4か月間全力投球しようと意気込む時であり、成果も楽しみでもある、まさに国際協力の出発点である。

施設見学で大手町の露場を見ると必ず設置場所が悪いと言う。自動観測、レーダー、地震、予報現業どれも憧れて気象庁で働いてみたいとの感想を漏らす。

3.5 研修の実際と研修員

研修スケジュールは観測部関連講義から始まり、親睦を図るため早めに関西研修旅行があり、本庁を間に挟んで気象大学校、気象衛星センター、気象研究所、見学数か所、札幌研修旅行、最終報告会、閉講式で終了する。大手町、柏、清瀬、つくば、と通う場所に交

化があるので中だるみもなく、深刻なホームシックに罹らず、毎年殆ど100%の出席率である。

研修期間中に誕生日を迎える人がいれば、研修の放課後、講師や外事官にも参加願ひ、小さなケーキを囲んで簡単なパーティを開く。ユニセフカードに各国語のお祝いの寄せ書きが並ぶ。ケーキを12人で分けると1人30度。細くて倒れてしまうが、とても喜ぶ。つくばで誕生会をする時、東京から持ち運べるバウムクーヘンにした。ちょうどRegion IIの測器研修があり、私達も部分参加した。測器の専門家であるWMOのMr. ShulzがJICAメンバーに臨時で特別講義して下さることになり、夕方気象研究所に来られたが、その日がケーキの日で、バウムクーヘンは故郷東ドイツのお菓子だそうで、とても懐かしみ喜んで下さった。

日本滞在中に故国で子供が生まれることがある。某アフリカ国では男子誕生は、自分の人生に何があってもいいくらい大きな意義だそうで、長男誕生を祝って欲しいと頼まれた。一切れ30度のケーキでも、皆で国際的に祝うことが格別良い思い出になるとのこと。

12月札幌に行く前に北海道では葉物野菜を凍らさないうために冷蔵庫に貯蔵すると説明すると覚悟が決まるらしい。上野外事官が浅草橋で大量購入した各種サイズのゴム長靴と、善意の寄贈の防寒着が保管してあり、出発前に貸し出す。色彩鮮やかな借り物衣類にゴム長軍手姿の一群を連れて羽田へ行くのにはちょっと勇気が要った。自分たちで「国際難民団」と言うくらいだから、空港のチェック体制が厳しくなってからゴム長はホテルへ宅配になった。大半の研修員が雪は全く初めてとか、山頂の雪は見たことあっても降る現象は初めてとかで楽しみにしている。折角なので雪景色であって欲しいと常に願う。幸運なグループは3日間で寒気の雪と低気圧の雪と2種類体験したし、機内から白い地上が見られたグループの感想は「こんな氷の下でどうやって生活を営んでいるのだろう」だった。JICAが来ると降ると言う「ジンクス」があると言われたほど、大抵降ってくれる。ちらほら降ってきたとたん、ホテルから街へ踊り出て狂気のように喜んだ人たちもいた。天狗山に登ると国際雪だるまも作れるほどの雪にありつける。白い露場は大喜び。札幌は帰国国際の修学旅行で、雪と心温まる歓迎会と相まって印象深い。冬期季節風観測が旅行の趣旨なので、日本海に出て気温より温かい水温を感じて貰う。ついでに塩分もチェックした人がいて、低緯度の海より塩気が低いそうだ。ゴム長靴が海岸で威力を発揮するが、それで

も海水や雪を詰まらせ、ローカル線の駅待合室で地元の人に笑われながら靴下をストーブで乾す。積もった雪を見ればすぐ雪合戦。地元の小学生たちが黙々と雪道を歩いている傍らで、髭の大男たちが楽しそうに派手に騒いで雪と戯れる光景は対照的である。

研修場所へは道案内するが、慣れると自分たちで通う。体調が悪くて休む時は必ず仲間の誰かに知らせる約束なので、顔が見えないと宿舎の部屋に電話して様子を聞く。ある年古傷の膝がうずいた研修員が階段の多い気象大学校を諦め欠席した。宿舎内のメディカルコーディネーターに連絡すると、すぐ整形外科医に連れて行ってくれた。本人は思いがけなく早く最適な処置が受けられたと感謝感激だった。研修員の体調観察は私の業務の1つである。病氣・怪我については誰がどう対応したか経緯が記録に残る。研修員を「預かっている」気象庁、ジャイカ、私の三者にとって、毎日の皆の元気な顔ぶれが何よりなのである。

外泊は可能だが、連絡先明記が必要である。某中近東研修員がある朝気象庁に来なかった。誰も前日から会っていない由。宿舎のフロントに電話すると、同国人数人が昨晩から行先不明で戻っていないと言う。おりしも政治的に不穏な事件があり、巻き込まれたのではないかと深刻に心配した。連絡も手掛かりもなく気を揉んでいると、昼過ぎひょっこり本人が現れた。満面の笑みをたたえて、「東京近郊の同胞の家に仲間数人と泊った。朝大手町へ出て直接気象庁に来るつもりだったが、いつもと違う出口だったので迷子になり、『JMA』はどこかと聞いたのに誰も教えてくれなかったのだから来れなかった。仕方がないので宿舎に戻ってシャワーを浴びてから来た」との笑顔の釈明に、気を揉んだ長谷川外事官と私は、安堵の反動で怒りがこみ上げた。温厚な外事官があんなに怒るのを見たのは初めて。「大手町から宿舎に帰れたのなら、気象庁に来れなかったという言い訳は立たない。何故もっと早くせめて電話連絡（国際業務室の電話番号は最初に教えてある）してくれなかったのか！」ごもっとも。それ程預かった研修員の無事・健康の確認は重要なのだ。研修成果の豊かな実りも勿論だが、「失踪事件」として忘れ難いこの件で学べたのは、『JMA』でなく「Kishocho」で徹底しようということであった。

宿舎はミニ国連と言われるくらい、JICA対象諸国から常時400余人が宿泊していて、日本文化紹介(日本語クラス、着物ショー、習字、料理、茶道、華道)、鎌倉遠足、ホームステイ、他にアジア、アフリカ、ラテ

ンパーティも企画され、ホームシックに罹らないように種々の工夫がなされている。研修が無事終了する裏には、宿舎での生活が楽しいことも一要素と言える。部屋でCNN、BBCが見られるので、自分の国がニュースに出なければひとまず安心とのこと。週末のラウンジは国際パーティーになり、楽しい反面、時には飲み過ぎ騒ぎで喧嘩に発展することもある。賑やかなラウンジの様子に、帰館した某研修員が覗きに行った時、派手な喧嘩が始まり、ただ居合わせただけの彼も駆けつけた守衛に現行犯の1人と見なされてしまった。翌日私も呼び出された。日頃の穏やかな態度を知っているので極力弁護したが、それでも彼は始末書提出と研修には出席してよいが一週間の「謹慎」を言い渡された。一番軽い措置だそうだが、以後、研修員には「君子は危うき・」を説く。

グループの大半が夜の日本語クラス（月火水6時半から8時）に出る。入門では挨拶や自己紹介。職業を言わせるにつき、研修員の言う Meteorologist をどう表現するかと、日本語講師から相談を受けた。結局「気象の仕事をしています」と言うことになった。クラスメートも出来るし、3週間単位で6割出席すると貰える修了書も欲しいので、熱心に受講する。いろいろな場面の会話をお互いによく練習する。ある時混み合う電車の中での練習が病気の場面で、「頭が痛いです」、「お腹痛いですか」などとやったので、乗客の怪訝そうな視線がとても気になった。

最後に最終報告会がある。自由にトピックを選択し、何を学んだか、研修成果を国でどう活かし、応用するかをまとめる。報告会にはコメントや助言のために担当の講師も出席する。それに先立って個別研修もあるので問題意識が明確な人ほど掘り下げた内容になる。

気象庁最終日に長官から気象庁での研修終了の証書を授与される。当初はなかったが、研修員たちが他の研修コースの仲間たちが受入先で授与されているから、気象学でも欲しいと言い出したことから始まった。先の最終報告会も当初はなかったが、他コースで実施していて効果的なので提案した。

翌研修最終日の最終評価会では研修員の忌憚のない意見聞き、研修成果を評価し今後の研修向上の参考にする。続いておごそかに30分の閉講式。研修員各国と日本の大きな国旗が整然と並ぶ前で、JICA 代表 TIC 所長祝辞、気象庁代表の部長祝辞、JICA の修了証書授与、研修員代表の謝辞、国旗を囲んで記念撮影で公式にすべてが終了。研修員代表を決める根拠はその年に

よって違いますが、グループのリーダー格、年長者、地域的公平さ、初参加国など、名誉なことなので全員が納得のいく根拠を説く。式典の後は送別ブッフエパーティ。4か月間兄弟のように過ごした研修員たちだが、全員が揃う機会は今後なく、世界各地に散る名残惜しい別れになる。早い便の人は朝6時には発つ。

帰国指定日に全員が元気に帰国後、安堵の間もなく気象庁、JICA、研修監視員の三者で反省会があり、研修員の意見・希望や研修成果から次年度の方針を話し合う。好評だった講義、もっと詳しく学びたい項目、内容が多彩なのに時間が短い、実習が少ない、途上国の実情に合わせて、などの意見を反映させて新規発足の気象学は内容の更新を試みる。

巡回指導というシステムがあり、研修員の累計数字やある期間ごとに、JICA と気象庁の担当が研修員出身国の気象局を訪問し、研修が実際どう活かされているか実地検分する。多くの研修員が来日した東南アジアの主な国々はすでに訪問済みで、90年代はメキシコとブラジルに、気象庁から佐々木外事官が訪問した。過去に研修参加した気象局の中堅スタッフや関係者と会い、意見交換や指導を行う。現地でも高い評価を受けていて、気象学コースが重要な研修であることを強く実感したとのこと。

世界各地で元研修員の多くが長官として、部長として、活躍しているのは大変喜ばしいことである。

4. エピソード その他

4.1 大型台風9019号との遭遇

1990年9月17日から1週間の関西方面研修旅行で、研修員10名を連れて戸矢外事官と最初の訪問地広島に向けて新幹線にいた。その日は平和祈念公園、翌日が宮島見学後、広島地方気象台を訪問して大阪に向かうという日程だった。沖縄近傍で台風がゆっくり進んでいる時だったが、車窓の景色は穏やかな田園風景だった。まだ携帯電話もないあの頃、突然車内放送で「気象庁の戸矢様」と呼び出しがあった。広島地方気象台長から、「明日はフェリー欠航だろうから、宮島には予定を変更して今日行くのが良い」との忠告だった。

宮島では風が強く、時折大粒の雨がパラッと来たが、空は青く大勢の観光客がいた。厳島神社は修学旅行の記念写真でごった返していた。ネパール研修員が「学生たちが写真を撮る時、私の名前を言う」と言う。男子の撮影が済むと先生の「女子!」と言う声に女生徒たちがぞろぞろ動き、ジョシという名のその研修員は

嬉しそうだった。

翌日の日程も済み、夕方広島から新大阪へ移動した。その日に限って座席に二重発券の先客がいた。一悶着あったが無事定刻に大阪に着き、ホテルで何げなくテレビをつけると、今通ってきたばかりの岡山付近はがけ崩れで新幹線は全面運行中止というニュースで驚いた。もう少し後の列車だったら足止めで、二重発券であろうと大阪に来られたただけでも幸運だったと神妙に感謝するほど時間的にきわどかった。

大阪管区気象台は毎年の訪問と打って変わって報道陣のスタジオと化していた。大型台風がその夜にも近畿地方に上陸か、29年ぶりに大阪方面直撃か、というまさにその日の午後、JICA グループが現れ、本物の台風より先に JICA 台風が来たと言われた。

ロープが張られ、緊張した雰囲気の中、立ち入り禁止の臨時体制の予報課現業を身を乗り出すように興味津々で遠巻きで見学していると、中から主任専門官が紙を持って出ていらして我々を一隅に招き、ロープ越しに「総合解析の結果、大阪直撃ではなく和歌山方面に進む予想で、これから発表する」とご親切に最新情報を説明下さった。我々への参考資料として用意された風分布の赤鉛筆の解析で、風向の順転が示してあった。ご多忙中、その臨場感を共有させて頂き感激だった。バングラデッシュ研修員が、「日本はこんなにコンピューターが発達している、わが国と同じ赤鉛筆作業もあって嬉しい」といみじくも言った。

30年の現業見学の中で、臨戦体制でも JICA 研修員を受け入れて下さって情報を報道関係より先に分け与えて下さったのは、大阪管区の予報課現業のこの緊急事態の時だけだった。張り詰めた緊張感とチームワークの良さに全員が興奮の面持ちで深く感じ入り、強いインパクトが得られた。時の植村管区台長はじめ皆様にとっても感謝している。

恒例の懇談会は大型台風接近のため中止と伺っていたが、気象台近くの居酒屋で有志の方々が出て下さり、これまた感激だった。宴が終わって外へ出ると強風にあおられた。ちょうど予想通り和歌山県白浜町に上陸した頃で、台風を経験したことの無いブラジルやチリの研修員たちが強風の中にしばし立ち、中心付近の猛威を全身で受け止めた。

翌20日は大阪花博覧会見学の日。植木鉢は倒れていたが、まさに台風一過の青空だった。各国の花の展示やパビリオンがあるので、広い会場の中を研修員の国々の展示を探して案内し、疲れたけれどとても喜ば

れた。自分の国のパビリオンに入るとホスト気分でウェルカムと言って得意気に説明してくれた。その日はブラジルで賑わいブラジル研修員が喜んだ。各国研修員を引率するのは毎年のことだが、国際博覧会はこの時だけで¹⁴、国際色豊かで有意義な国際親善だった。

がけ崩れを危機一髪で逃れ、大型台風と大阪で遭遇し、緊迫した現業を見学できて、台風一過の青空の日に花博を見て、気象学の研修旅行として最高の演出になった。後日この大型台風に関する解析を読むと、890hpa を記録した猛烈な台風だったそうで、そんな台風に向かい、くぐりぬけて無事全日程をこなした大冒険の旅行の経験は、研修員10人の引率者の1人としてことさら忘れ難い特別なものになった。

4.2 良い講義

講義に当たって一部の講師に見られる日本の美德の「謙遜」は異文化の団体には通用しない。「この部署には4月に異動で来た。気象学については皆さんの方が詳しいと思うが、よろしく」といった挨拶は申し訳ないが文字通りには伝えない。べらんめえ調であろうとも、個性豊かに自信ありげに話して下さると、全員目を輝かして聞く。

一方的な講義でなく、質問を投げて二方通行にし、考えさせるのが効果的で受けが良い。テキストの棒読みは歓迎されない。テキストを読むのは自分たちで出来るから、経験を話して欲しいという要望がでる。講師に意見を求めるような質問が出た場合、無難な模範解答でなく「あくまで自分の個人的な考えだが」と前置きして私見を述べて下さるのが好まれる。

途上国への技術移転を視野に入れ、パソコンだけでもここまで出来ると具体的にパソコン版にして講義・実習を用意して下さるのは有難い。「これがなければ無理」では救いようがないが、設備の乏しい途上国でも「これがあればこれだけ出来る」と希望と意欲を持たせて下さる講義は素晴らしい。難しい内容も研修員のレベルになって話して下さると消化も吸収も抜群に良くなる。

映像類も説明するだけより何だと思おうかと考えさせるほうがずっと効果的。特に衛星画像の場合、皆の意見を積極的に出させて国際競争心をあおる方法は非常

¹⁴ 関西方面技術研修旅行では、広島や大阪の気象台の他に、江波山気象館、神戸海洋気象台、淀川ダム管理事務所、関西国際空港、京都大学防災研究所などがその時々の見学先である。

に勉強になり、盛り上がる。講義で数値が出てきたら、場合によってはそのまま通訳せずに「皆に聞いてみてもいいですか」と了解を得て質問形にする。

例えば、気象研究所の風洞見学の際、350分の1の大手町の模型の前で、説明官の了解を得てから「この縮尺は？これはどこか？」と聞く。つくばに行くのは11月で大手町は見慣れているので、ヒントを出せば解かる。縮尺には途方もない数字も飛び出す。

4.3 食事

生魚は食べない食生活の違いの他、宗教的制約や主義から食べられないものは多い。一般的な回教徒は豚肉と酒類はダメでも鶏肉は可。戒律が厳しいと鶏肉でも特殊な処理肉（ハラルミート）以外は口にせず、魚、乳製品、卵、野菜などに限られる。日本にもハラルミートの需要はあり、宿舎の食堂でも表示つきでこのミート使用の料理が並ぶ。菜食主義者にも卵可と卵もダメというタイプがある。宿舎では菜食者用料理もあり、メニューは多彩ではないが、誰でも安心して食事を楽しめる。

外での食事は一苦労。戒律厳しい回教徒の場合、魚とはうろこがあって泳ぐ魚であり、貝、海老、いかなどは含まない。ヒンズー教徒は牛肉はご法度。旅行中、スーパーで買って公園でピクニックをしてから訪問先に行く計画はのどかなようだが、「コロッケに豚肉が入ってないか」、「野菜のてんぷらに卵を使ってないか」など質問攻めで、買い物に手間取る。菓子パンをよく選ぶが、卵が入っているとは言わないことにしている。こちらが知らない時でも食べていて問題ないし、何か食べて貰わないと困るので。

パーティの時は必ず誰でも何かは食べられるように打ち合わせする。チーズは可なのに、ハムと一緒に大皿盛り付けだともうダメなので、別皿にして頂くよう細かい注文もお願いする。菜食主義者もサラダだけでなく、穀類、果物、ナッツ類、乳製品は欲しい。野菜ピザは最大公約数。食事制限の人たちに「これしかない」とは決して言わず、「これこれがあるよ」と示せば「配慮してくれた」と感謝するので、皆の立場の目線で行うようにする。

日本料理には「砂糖が入っている」、お弁当は「冷たい」と言う。居酒屋はいろいろ試せる良い機会です。雰囲気も大好評。すぐ空になるのは塩味焼き鳥とジャコ入り焼き飯で、鍋物もその時の顔ぶれに合わせた材料にすれば大受けである。「釜の飯」を引用・発展して、お鍋を囲んで皆で食べるのは親交を深める、と前置きの

説明をすると嬉しそうにフォークの手が伸びる。

気象庁の食堂や喫茶を利用することもある。喫茶では最初に回教徒研修員を紹介しておく、顔を見ただけでハム抜きサンドやツナスパゲティを用意してくれる。気象研究所では選択肢がないので、研修期間中の予定献立から無難なのを予約して貰う。質問で講義が長引いても安心だから、食券発売機や小鉢選びにもたつき、後ろに長い列ができて気になる。食事には通常お金をかけない。持ち込める時は朝食の残りものを（宿舎は朝食付き）。賢く節約しておみやげに回す。

回教徒の断食月ラマダンは暦上少しずつ前倒しになるため、2000年から研修期間の12月にかかってきた。前の晩に用意された朝食セットを日の出前に食べ、以後日没まで飲食しない。午後の見学先でラマダンの人がそばにいる時に出されたジュースを飲むにも気になる。中緯度の12月なので日中時間が短めで助かると言っていたが、いずれ猛暑のまるまる1か月だから大変。日没、つまり太陽の最後のかげらが地平線に隠れるのを確認してから、用意してある飲み物をゆっくり口にすると、こちらも何だかほっとする。その年札幌から東京への帰路の機内で、離陸時間が日没時間とほぼ同時刻だったので、「地上で沈んだ太陽が離陸直後の上空で再び見えてしまったらどうする？」と同行の弟子丸外事官が聞くと、沈んだ太陽がまた顔を出すというシナリオはないらしく、笑顔が返事だったとか。私も「白夜のラマダンの極の冬はどうするの？」と聞いたことがある。非常時には標準に合わせるなど、対処方がある、という答えだった。

4.4 研修旅行

研修員間の親睦を図る目的もあり、来日後2週間目あたりが5泊6日の関西方面旅行になる。新幹線は知っていて楽しみにしている。旅程を立案する際、のぞみは使えないので、なるべくのぞみに追い越されない新しい車両のひかりを指定する。速さ、正確さ、快適性、車掌の丁寧な態度、街から街が切れ目なく続く景色が驚きの様子。畑が見えるとはっとする由。小学生や幼稚園児の遠足に出会うと、向こうから無邪気にハローハローと言ってくるし、研修員も嬉しそうに握手したり目じりを下げて一緒にカメラに納まったり。旅先ならではの微笑ましい光景である。日本文化紹介も旅行目的のひとつである。

管区气象台や地方气象台に気象庁と同じ設備があるのに感心する。

親睦を深めるために夜、ホテルの一室でパーティを

開く。自室から椅子とコップを持って、浴衣を着て来ることが条件。ジーパン T シャツの上に羽織ったり、左前の妙な姿でやって来るので、まず着方指導。シングル室に10人以上ぎっしり集まると、もうそれだけで団欒ムードに。おとなしい人、英語力の弱い人にスポットを当て、くつろいだ気分で賑やかに笑い合っていると、歌、ジョーク、小話の披露が続き、皆の個性や長所が見えてくるし親密度も加速する。和やかな雰囲気作りも研修の成功に不可欠な一要素である。

5. 30年を振り返って

5.1 関わった経緯

気象庁と30年にわたる深いご縁になるとはその時は思ってもいなかった。1973年、南米から帰国し仕事を探している時、海外技術協力事業団(現ジャイカの前身)の求人欄の「国際協力」という文字に惹かれた。技術協力であるにもかかわらず、試験は語学力だけだった。非常勤研修監理員として登録し、短い農水省での実践の直後、気象学の前身である「洪水予警報コース」に配置された。理由は気象研究所が当時の私の仮住まいの東高円寺に「近いから」であった。「でも柏は遠い」と贅沢な躊躇をしたのに、以後30年も続くことになったのは、やはりご縁は深かったのだと改めて感じる。このご縁をととても大切に思う。

5.2 最初の年の思い出

とても鮮明である。商店街や住宅を抜けると気象研究所の裏口で、台風研究部への近道だった。広い敷地にバラック風の建物が点在していて、あまりの素朴さに研修員に感想を聞くと、「研究は中味が重要で建物ではないから」と答えたのは後のマレーシア長官のリムさんだ。ストーブを囲んだコの字型の机の床は木製で、歩きながら講義する講師の靴音が鳴ってよく聞こえなかった。どこから調達したか記憶にないが、休み時間に研修員と結託して黒板の前に敷物を敷いた。

研究官の英語の講義を必死でメモを取って初めての学問に接した。論文の和英版を頂いたが難しすぎた。数式のない参考書として薦められた斎藤鍊一著の「気象の教室」と高校の地学を毎日抱えて読んだ。高円寺商店街で響いた朗々とした「石焼い〜も」の声に「近くにモスクがあると言い張った回教徒研修員がいた。確かに、中近東で聞いたモスクの拡声器から流れる祈りとよく似た節回しではあったが、高円寺の最終日に今井所長が昼食に招いて下さり、私も励まして頂いた。

気象庁に初登庁して感じたのはサンダル履きと手編

みセーター姿が多いということ。講義の殆どが台風予報とレーダーだった。ガラス窓に図を当てて赤鉛筆と青鉛筆を使って折りたたみ、繰り返していくと指向流が判るという graphical method に研修員たちは「誰がこんな方法を発明したんだ」と手を焼いた。

研修室は予報部会議室の一部をジャバラカーテンで仕切っただけだったので会議の話が聞こえすぎて困ることもあった。その会議室で毎月17日、山済みのお束を給料袋に入れる丸見え作業があり、のどかな時代だった。研修員も今は銀行振込を当然のように思うが、当時は担当が袋に入れて手渡してくれるのを有難く受け取りに向いたものだ。気象庁の人口構成は逆ピラミッドで、大正生まれの方々が多かった。総観予報の実習は予報課現業室の脇で各自大きな紙を広げ、熟練予報官数人の指導のもとに豪勢に行われた。「厩厚」という言葉の意味をその時知った。

当時の研修は年末年始を含む10月から1月だった。新年には高橋長官が公邸にお招き下さり、日本のお正月のすべてを和服姿のご家族で温かく手厚くおもてなし下さった。業務課が出初式にも連れて行って下さり、この年の研修員は特別幸運だった。

5.3 雑感

初期の頃、ペンが音を立てながら高速で各地のシノップを整然とプロットしていく XY プロッターに研修員たちは目を見張った。衛星写真も、当時は極軌道衛星を本庁の円形のドアの中で焼いていたようだったが、写真がきれいで額に入れて飾りたい、上司のおみやげにしたいなどその画質を称賛した。清瀬で研修使用後におみやげになる特大の高画質のひまわり写真も宝物のようにした。グレースケール測定のために写真の上部を切り取ったものを物差しのように使って温度を推定する実習があったが、せっかくの写真に細長く穴が空いたと不評だったので、研修担当官はご苦労だったと思う。濃度計で測って数値が違う焼き具合の写真はくずかご行きだったので、皆で競って拾った。私もひまわり1号のくずかご写真を持っている。風計算はテーブル上の紙に投影されたループからターゲットを追いかけてパンチする当時の方式の本物で実習させて頂いた。

衛星画像は殆どの国も取得しているので、衛星データを使った研修や実習は即応用可能である。初期の雲解析は透明なフィルムを画像の上において雲域・雲形判別を描き、布で消す作業だったが、SATAID という素晴らしい雲解析ソフトが誕生し、パソコン上で雲解

